Special Feature

リロイ・ヴィネガー特集

"The Walker" Leroy Vinnegar

本誌『The Walker’s』は 1950~60 年代のウエスト・コースト・ジャズを代表するベースマンで、“ ウォーキング・ベースの名手 ” と称され、"The Walker" のニックネームを持つリロイ・ヴィネガー（Leroy Vinnegar）に由来する。リロイさんがオレゴン州ポートランドで息を引取ったのは 1999 年 8 月 3 日。この夏で 13 回忌を迎えました。本誌も今号は区切りの「Vol.30」。初心を振り返ると共に、今号は天国のリロイさんに捧げたいと思います。

The Walker's 発行人＆編集人　加瀬正之

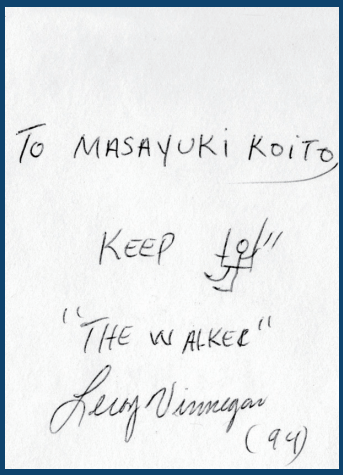
Photo by Howard Morehead (FSRCD-1601)

はじめてリロイ・ヴィネガーのベースを体験したのは、生まれて初めてウッドベースという楽器を手にした 19 歳の時…。リロイさんの 1st リーダー・アルバム『リロイ・ウォークス！』の 1 曲目に収録されている「ウォーク・オン」のベース、そして、妙な懐かしさを帯びた古き良き時代のガット弦の響きに衝撃を受けた。それ以来憧れの存在だったリロイさんに生前ポートランドで会えた時の感動は今でも忘れません。大好きだったアルバム『リロイ・ウォークス！』にサインをもらい、一緒に写真を撮ってもらい、愛用のベースに触らせてもらい、ライヴの合間に二人でいろいろな話もさせてもらいました。

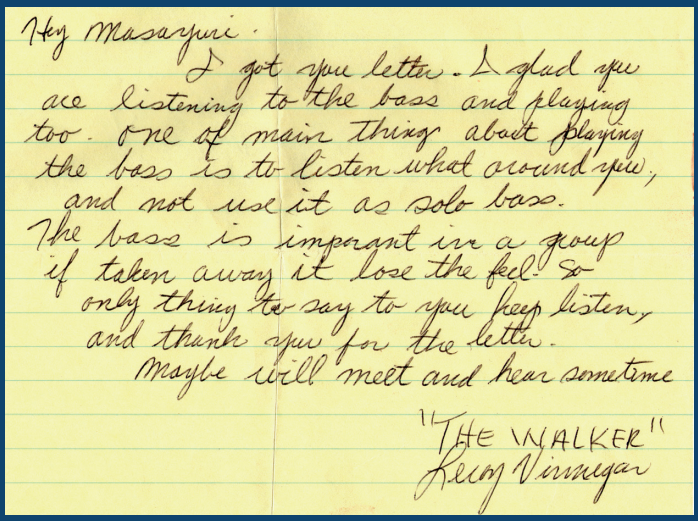
まずは簡単にリロイさんのプロフィールを紹介します。1928 年 7 月 13 日、米国インディアナ州インディアナポリス生まれ。独学でピアノを学び、1945 年にピアニストとしてキャリアをスタートし、1948 年にベーシストに転向。地元インディアナポリスで、ウエス、モンク、バディのモンゴメリー兄弟等と共演。1952 年に友人でベーシストのイスラエル・クロスビーの紹介でシカゴに移り、ジュニア・マンスと「ビー・ハイブ」で、ビル・ラッソと「ブルーノート」で活動し、チャーリー・パーカー、レスター・ヤング等と共演を果たす。50 年代半ばにロサンゼルスに拠点を移し、アート・テイタムのトリオに参加。その後もスタン・ゲッツ、テディ・エドワーズ、シェリー・マン等とのセッションをはじめ、LA を中心に活躍し、50~60 年代のウエスト・コースト・ジャズを代表する売れっ子ベーシストとなる。1964 年 3 月には、『四大ドラマーの競演（DRUM BATTLE）』と題するコンサートで、マックス・ローチ、シェリー・マン、フィリー・ジョー・ジョーンズ、ロイ・ヘインズ、ハワード・マギー、チャーリー・マリアーノ、秋吉敏子等のメンバーと初来日を果たす。70~80 年代にかけては、体調を崩すなど活動休止期間があったが、1986 年からのポートランド移住を機に、1992 年にレコーディング復帰。その後は、晩年までライヴやレコーディング活動を精力的に行なう。1995 年には、オレゴン州より 5 月 1 日を『リロイ・ヴィネガーの日』として認定され、オレゴン・ジャズ・ソサエティーのホール・オブ・フェイム第 1 号となる。1952 年以降、800 以上ものレコーディングに参加。身の丈は約 190 センチ。“ ウォーキング・ベースの名手 ” と称され、"The Walker" のニックネームで親しまれた。1999 年 8 月 3 日（米国現地時間）、心臓発作のため、オレゴン州ポートランドにて死去。享年 71 歳。

ジャズ・ベースを学ぶために単身ニューヨークに渡ったのは、大学の卒業式から 1 週間後。当時はまだインターネットが一般に普及する前で、リロイさんの消息は 80 年代以降全く聞かれず、正直まだ生きているのだろうか、少なくともうベースは弾いていないのだろうな…と自分の中では行方不明の状態にあった。渡米から約 1 年後、ニューヨークでの生活も落ち着いてきた頃、ふと立ち寄ったアッパー・ウエストにあったタワー・レコードのジャズ・コーナーで偶然に見つけたリロイさんの約 18 年振りのリーダー・アルバム『Walkin' The Basses』。興奮と感動のあまりライナーに書かれていたレコード会社宛てに英語で手紙を書いた。まだ生きていてくれたのか、まだベースを弾き続けているのかという喜びが勝り、たどたどしい英語で「あなたは僕のアイドルです。ぼくは日本人で現在ニューヨークでウッドベースを学んでいます」というような内容の手紙を書いた。もちろん返事が来るなどとは夢にも思わず、リロイさんのニュー・アルバムをリリースしてくれたレコード会社への感謝の気持ちもあった。そして、ライナーにはリロイさんは現在ポートランドで暮らしていると書かれてあった。

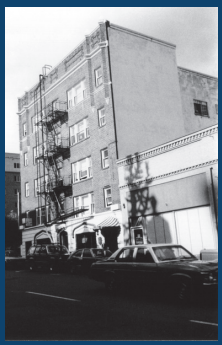
その後、手紙を出したなんてこともすっかり忘れていたが、それから約 1 年後の 1994 年の秋頃。レストランでのウェイターの仕事からアパートに帰ると、1 通の封筒が届いていた。ステッカーに印字されていた送り主の名前を見て、天にも登る気持ちになった。Leroy Vinnegar という名前と Portland の住所…。【～ P7 につづく～】



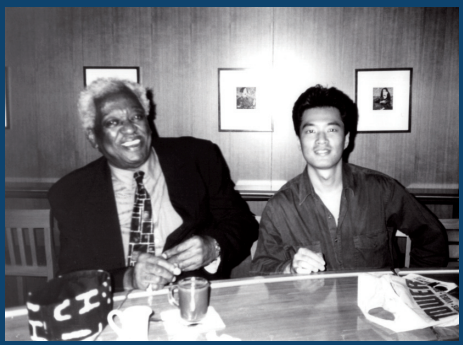
リロイさんから届いた手紙に同封されていたポートレート入りのカードに書かれていたリロイさん直筆のメッセージ。（1994 年）



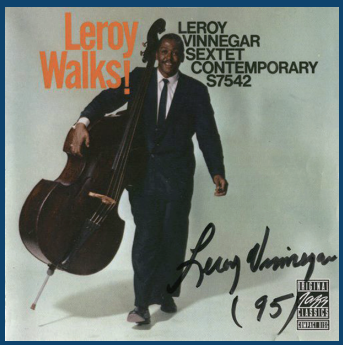
ベースマンの真髄が書かれたリロイさんからの手紙～一生の宝物です。（1994 年）



リロイさんのアパート前



ポートランド「Atwater's」にて≪右は編集長≫（1995 年）



リロイさんの直筆のサイン（1995 年）

C・カーター、中村照夫さん、リロイさん
【写真は中村照夫さんよりご提供頂きました】

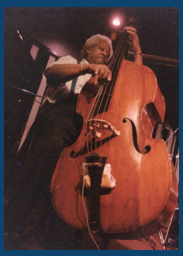
ブルーノ・カー、リロイさん、菅野邦彦さん
【写真は中村照夫さんよりご提供頂きました】

中村照夫さんより今号のリロイさん特集のためだけに特別にお送り頂いた貴重な写真

リロイさんが中村照夫さんに贈ったカード

「Atwater's」で編集長が撮った一枚（1995 年）

リロイさんとF・フォスター（1993 年）



The Walker（1995 年）

リロイ・ヴィネガーの 27 枚

The Walker 27

リロイさんの正式なリーダー・アルバムは『Walkin' The Basses』までの 6 枚。貴重なライヴ・アルバムにリロイさんへのトリビュート・アルバム。そして、サイドマンとして名演を聴かせてくれた名盤も合わせて、リロイ・ヴィネガー作品 Best 27 を選びました。

リロイさんの名盤＆1st リーダー作品！

1957 年録音

リロイ・ウォークス！
リロイ・ヴィネガー・セクステット
ユニバーサル・ミュージック : UCCO-9793

名曲「フォー・カール」収録の 2nd です！

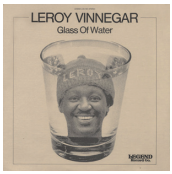
1962-63 年録音

Leroy Walks Again!!
Leroy Vinnegar Quintet!!
Original Jazz Classics (Import CD)

自慢のウォーキングベースが唸る 3rd！

1964 年録音

Jazz's Great "Walker"
Leroy Vinnegar
Vee Jay (Import CD)



未だ CD 化されていない 4th です！

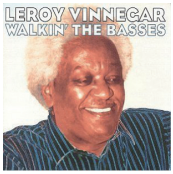
1973 年録音

Glass Of Water
Leroy Vinnegar
Legend (Import LP)

エレクトリック・ファンクな名盤 5th！

1974 年録音

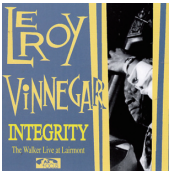
ザ・キッド
リロイ・ヴィネガー
P-VINE : PCD-2589



スタ＆最後のリーダー作の 6th です！

1992 年録音

Walkin' The Basses
Leroy Vinnegar
Contemporary (Import CD)



晩年のライヴを収録したアルバムです！

1995 年録音

Integrity: Walker Live At Lairmont
Leroy Vinnegar
Jazz Focus (Import CD)

幻のライヴを収録 CD 化嬉しです！

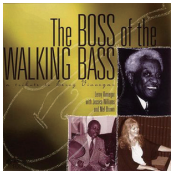
1958 年録音

Sessions, Live
Oscar Peterson / Leroy Vinnegar
Calliope/ Andasol (Import LP)

リロイさんの最後のレコーディング作！

1997 年録音

モダン・リフレクションズ
ランディ・ポーター
PCS : MTCJ-6510



リロイさんのトリビュート・アルバム！

2000 年録音

The Boss Of The Walking Bass
Leroy Vinnegar
Jazz Focus (Import CD)

リロイさんのトリビュート・アルバム！

2001 年録音

Leroy Vinnegar Suite
Alan Jones Sextet
Alan Jones (Import CD)

リロイさんのトリビュート・アルバム！

2009 年録音

Hard To Find
Giovanni Sanguineti
Ultra Sound (Import CD)

ジャケットも最高の一品！

1955 年録音

Dexter Blows Hot And Cool
Dexter Gordon
Fresh Sound (Import CD)

盟友カールの哀愁の名盤！

1955 年録音

Introducing
Carl Perkins
Fresh Sound (Import CD)

ウォーキングが冴え渡る！

1955 年録音

トーキン・アンド・ウォーキン
ケニー・ドリュー
EMI ミュージック : TOCJ-6870

リロイさんの最大ヒット作！

1956 年録音

マイ・フェア・レディ
シェリー・マン＆ヒズ・フレンズ
ユニバーサル・ミュージック : UCCO-9954

西海岸ジャズの魅力満載！

1956 年録音

The Route
Chet Baker / Art Pepper
Capital/Pacific Jazz (Import CD)

ロリンズとの相性も抜群！

1958 年録音

コンデンポラリー・リーダーズ
ソニー・ロリンズ
ユニバーサル・ミュージック : UCCO-9968

グルーヴィーな名ライヴ盤！

1966 年録音

Live At The Lighthouse '66
The Jazz Crusaders
Blue Note Records (Import CD)

ドアーズの名盤にも参加！

1968 年録音

太陽を待ちながら
ザ・ドアーズ
ワーナーミュージック:WPCR-75075

ファンキーな名ライヴ盤！

1969 年録音

スイス・ムーヴメント
レス・マッキャン＆エディ・ハリス
ワーナーミュージック:WPCR-27019

このライヴ盤も最高です！

1970 年録音

メモリー・レイン・ライヴ
ハンフトン・ホース
SSJ : XQAM-1615

ヴァン・モリソンの名盤！

1972 年録音

セントドミニクの予言
ヴァン・モリソン
ユニバーサル・ミュージック : POCP-2606

バリー・ハリスとの共演作！

1975 年録音

Saturday Morning
Sonny Criss
Xanadu (Import CD)

西海岸真っ黒ジャズの名盤！

1976 年録音

サンダンス
アル・ウィリアムス・クインテット・プラス・ワン
Shout! Productions : SHOUT-243

中村照夫クロニュース作品！

1990 年録音

Estate
Kunihiko Sugano
Cheetah (Import CD)

トム・ウェイツとの共演盤！

1991 年録音

Mississippi Lad
Teddy Edwards
Polygram (Import CD)

4 階の部屋に駆け上がって封を開けると、「To Masayuki “Keep Swinging”（Swinging の部分は文字ではなく、ひとがブランコを漕いでいるイラスト）」と書かれたポートレイト入りのカード。1993 年の「マウント・フッド・ジャズ・フェスティバル」の会場で、リロイさんがサックスのフランク・フォスターと一緒に写っている写真が 1 枚。そして、1枚の手紙が同封されていた。手紙にはこう書かれてあった。「ベースを弾く上で大切なことは、自分のまわりの音をよく聴くということ。そして、ベース・ソロにこだわらないことだ。ベースという楽器は、バンドになくてはならないもので、ベースを取っ払ってしまったら大切なフィーリングを失うことになる」。そして、「君に言うことができるたったひとつのことは、自分の音、まわりの音をよく聴けということだ」。後にインターネットで見つけたリロイさんのインタビュー記事で分かったことだが、後者の言葉は、若かりし頃シカゴで切磋琢磨するリロイさんにチャーリー・パーカーがかけた言葉と同じだった。翌 1995 年、その手紙に印字されていたポートランドの住所を頼りに、憧れのベースマン＝リロイさんに会うためにニューヨークを飛び立った。リロイさんに会えるまでに紆余曲折～奇妙な運命の巡り合わせ等もありましたが、その時の詳細はまた別の機会に。

あの笑顔とグローブのような大きな手は一生忘れません。50~60 年代の全盛期から年を重ね、丸みを帯び枯れた味わいのある生のベースを耳にし、生前のリロイさんに一度でもお目にかかれただけでも幸せ者です。あの時から 4 年後の 1999 年 8 月 3 日、遂にリロイさんの人生のウォーキングは途絶えましたが、あのワン・アンド・オンリーなベースは永遠。天国でもきっとあのいぶし銀のウォーキング・ベースを聴かせてくれていると思います。

結局ミュージシャンとしての才能、努力も足りなかった自分ですが、この『The Walker’s』にはミュージシャン、ジャズマンへの憧れと敬意、そして、夢と魂を込めて、毎号自分自身のアルバムをリリースするような気持ちで発行させて頂いています。昨今いろいろと大変な世の中ですが、ミュージシャンに限らず、年齢に関わらず、夢は持っている方がいいと思います。そして、今回の特集が夢を持っている方々、夢に向かって邁進している方々、夢を追うことに躊躇している方々への多少の良い刺激になれば幸いです。

「ぼくがいいミュージシャンになり損ねたのは、音を出す前にあることないこといろんなことを　頭の中で心の中でいろいろと想像しすぎたからかもしれない。今、やっと気が付いた、音を出さなければ何も始まらないということを」

The Walker’s 加瀬正之 （Special Thanks to Teruo Nakamura）

リロイ・ヴィネガーに捧ぐ
For Leroy

これまで本誌≪ Jazz Interview ≫に登場して頂いたジャズマンにも時々尋ねていたリロイさんについての思い出やエピソードを紹介します。正にウォーキング・ベースのイノベイターであり、たくさんのベーシストやアーティストたちに影響を与えました。

バリー・ハリス / Barry Harris（ジャズ・ピアニスト）
「ウエスト・コーストでは欠かせない人物だった。」

中村照夫 / Teruo Nakamura（ジャズ・ベーシスト＆プロデューサー）
「リロイ・ヴィネガーのベースは 64 年にアメリカに来る前からレコードで知っていました。スタンリーのツアーでロスに行ったときに確かホモーサビーチにあった“ コンサート・バイ・ザ・シー ”で演奏をしているときにお会いしたのだと思います。私がプロデュースした菅野邦彦さんのアルバム『エスターテ』で演奏をしていますし、ジョー・リー・ウィルソンの『ザ・シャドー』でも演奏をしてもらいましたよ。リロイは「ベースは伴奏の楽器である。」という姿勢に徹していた人です。私の知る限りでは、彼はウォーキングベースソロしかやらなかったベーシストですよね。」

チャーリー・ヘイデン / Charlie Haden（ジャズ・ベーシスト）
「リロイはとても素晴らしいサウンドを持っていたし、特にウォーキングが素晴らしかった。彼は共演するドラマーをもっとスイングさせるようなベースを弾くことができたし、それくらい強力な音を出していた。まさにグレート・ウォーカーだね。」

スタンリー・クラーク / Stanley Clarke（ジャズ・ベーシスト）
「私が若い頃、初めてニューヨークにやって来た時にリロイのプレイを見たけど、凄まじいほど力強いベース・プレイヤーで私も好きだった。実際に彼の手は大きくて力強くて凄かったね。」

ジョヴァンニ・サングィネッティ / Giovanni Sanguineti（ジャズ・ベーシスト）
「彼は私にとって常にメイン・ベース・プレイヤーのひとりで、特にベースを弾き始めた頃に彼のベースをよく聴いていたんだ。他のベース・マスター達も素晴らしかったけど、彼のウォーキングやライン全てが最高だった。彼のソロのパートでもソロのようにウォークするところも素晴らしくて、あの存在感は凄い。それに、彼のリーダー・アルバムはそのサウンド、グルーヴ感、全ての楽器とのインタープレイ、どれをとっても常に私のお気に入りなんだ。彼は私を導いてくれた灯台のような存在で、私にとってベースの全てだね。そいうこともあって、私の作品の中で彼への感謝の意を表し、敬意を払うのが一番と思い、2009 年にデヴィッド・ヘイゼルタイン (p) とエド・シグペン (ds) と共にリロイ・ヴィネガーのトリビュート・アルバム『Hard To Find』をレコーディングしたんだ。」